
禍罪のパラノイア

雨時時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禍罪のパラノイア

【Nコード】

N8733S

【作者名】

雨時時雨

【あらすじ】

異能を持ち生まれた二卵性双生児の片割れ、『災禍』は無力で無垢な弟『雪崩』を自らの巻き起こした遊びに巻き込んでしまう。黒万屋の『異路馬劉輔』の手を借り、雪崩を助けるべく災禍が世界を壊す。

戦闘シーンあり。

だとしたら君は世界をなめすぎているよ。この世界は最悪だ、でも最高に面白い。

絡まり合う人間関係。

発狂した科学者の末路。

他殺者の自殺行為。

滅びて行く世界の核。

四肢を亡くしたピアニストの終わり。

柩に入った柩屋。

可笑しいんだ。片腹痛いね。涙が出るよ。

無理に予定を通そうとすると、途中で投げ出してしまふ事があるから易々と指示できない。ん？何を投げだすかって？決まってるだろ？

命だよ。

死んだら玩具が減るから嬉しくないんだよ。

どうせ死ぬなら、最高に楽しませてから死んでほしいよね。」

男はとんでもないことを楽しそうに、玩具の山を見つめる子供の様な顔でそう言った。

真っ白なスーツに身を包んだ男は、機械的な、でも楽しそうな笑いを零すと災禍に言った。

「今度は玩具でどんな事をするつもりなのかな？」

言いながら、革の黒いソファーから立ち上がる男を、心の宿っていない目で災禍は見上げた。男はひらひらと手を振りながら、仄暗いマンションの一室から出て行った。

災禍は濁った瞳を俯け、手に握った携帯のボタンを流れるように押して、ある三人のアドレスへ一斉送信した。

【魍魎ととコールという名の人間を殺せ。

いいいな？』パラノイア』諸君。】

『パラノイア』それは、裏社会ですら公にされていないある集団で。

殺人鬼の一族がトップに居るのだそうだ。
その一族を禍罪まがつみいぢぞく一族といい。それはその一族の子供に生まれたから、
姓が禍罪なのでは無い。ただ、禍罪一族の人間は物心が付き始めると、
体に溢れる力を持って余すようになる。

未来を予測することができる。触れずに『もの』を壊すことができる。
死なない。怪我や病気をしない。努力をしなくとも最高で最強。
怪力。

そんな、力をもつ者を見つけ、禍罪一族の養子にするのである。
パラノイアに入っている人間の殆どが、殺人鬼や詐欺師である。前
科持ちも数知れない。そのトップに立っているのがこの少年。禍罪
であり。禍罪一族の最後なのである。

なぜ最後かというと、遺伝子の改造があり。禍罪の血が生まれる前
に消されてしまうからである。

災禍はそんな中での生き残り、戦場から逃れきった兵士。モノクロ
の盤から脱戦し、その駒を動かす側に回った勝者だ。

災禍は淡い光を放つ携帯画面を確認し、音をたてて閉じた。ゆっくりとした動作で硝子テーブルの上のリモコンを手に取り、電源を付けた。ピンク色のスーツを着た女性レポーターが生中継の映像を送っていた。

「私は今、あるバーの前に来ています。たった今ここで、二人の男女が殺害されました。差益 魍魎さん（32歳）、リベット・コールさん（24歳）だそうです。」

画面の中に、入れ墨の入った坊主にサングラスを掛けた筋肉質な男と、金髪メガネの女の写真が映った。災禍は興味なさげにテレビを消した。

「仕事が早いな。さすがだ」

部屋の中でポツリとつぶやいた言葉は、確かな意味も持たずに床に落ちた。リモコンがごとりカーペットの上落ちる。そんなことも気にせずに災禍は立ち上がり、キッチンへ向かう。フローリングの床は冷たく、裸足の足はひたひたと小さな足音を立てた。シンクのキッチンの横の棚からティーカップを取り、ティーパックを入れてお湯を注いだ。透明なお湯の中で漂うティーパックから紅が染み出る。白いティーカップの中で絵の具を落としたような模様が広がっていく。

紅色のお茶からパックを取り出し、角砂糖を二つ入れた。カップを持ち、暗い部屋にほのかな光を放つパソコンに向かい合うように、回転椅子に座った。

もうインターネットではあの二人の死が話題になっていた。

「邪魔なモノは排除する。入らないものは捨てる。アタリマエだろ？ 異路馬劉輔。」

彼の口元には歪な笑みが浮かんだ。人を人として見ない。人は玩具である。まるでそれが、正論であるかのように、堂々とした表情で災禍は嘲笑する。

「災禍？ 誰か来てたんなら呼んでよ。」

災禍と同じ容姿をした同じ背丈の少年がほの暗い部屋の中から、ぬつと現れた。

「おはよう、雪崩」

災禍はその少年に微笑みを向けた。

あの異路馬劉輔に向けた冷たい表情ではなく、人間らしい温かみのある笑みを。

雪崩は災禍の双子の弟、彼は禍罪の血を引いていない。二卵性双生児だからだ。しかし彼と災禍と瓜二つな容姿をしている。

「おはよ、災禍。誰が来てたの？」

「あの陰険白スーツ野郎だよ」

災禍がはき捨てるようにそう言うと、雪崩はクスクスと笑った。

「異路馬さんだね。」

異路馬劉輔。この世界の全ての人材と情報を揃える人間だ。

彼の職業は万屋。何でも頼めば解決してくれるという職業。自殺の手助けや、暗殺依頼までこなす。それが異路馬劉輔なのだ。

2 (後書き)

すくろーるが伸びますww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8733s/>

禍罪のパラノイア

2011年10月8日23時57分発行